



A-TiC

広報誌エーティック・プレス

PRESS



FLY HIGH 2025

株式会社 エーティック

SINCE 1973

意欲を持った社員の成長を促す会社に

新年明けましておめでとうございます。

当社は一昨年に創立50周年を迎えました。昨年は「第二創業」のスタートの年と位置付け、社員一同、気持ちも新たに業務に取り組んできました。発注者の皆様のご指導・ご鞭撻、そして社員一人ひとりの切磋琢磨により、「第二創業」初年を無事に過ごすことができました。心から感謝申し上げます。本年度、当社はおおむね10年間を期間とする長期ビジョンを策定しました。この中でミッション(果たすべき務め)として ① 高い技術力の提供 ② DX・SDGs など変化への対応 ③ 災害など緊急時の迅速かつ効果的な対応—の3つを掲げ、このミッションを達成するためのビジョン(なりたい姿)では ① ともに成長する ② 応援され信頼される技術者集団 ③ 高い技術力と倫理観を持った技術者—を定めています。

幸いなことに、当社には能力ある優秀な社員が数多くいます。大切な人材を活かしながら具体的な施策を進めるため、今年度より研修を通じたキャリアプランの策定・実行支援や、面談の質向上といった人的支援に力を入れています。それぞれの人生設計を構築し、人としてどう成長していくのかを深く考え、人生の目標と仕事の将来像を明確にすることで、一人ひとりの成長を促すことを目指しています。

社員が意欲を持って成長し、支え合い、切磋琢磨する会社が私たちの理想です。その過程で、技術者として高みを目指すと同時に、家族や大切な人々との幸せな生活を実現することが非常に重要だと考えています。そうした目標を実現するためのステージを提供し、環境を整えることが、会社としての役割であり、私自身の使命であると考えています。

業務の現場を見ると、業務を完成させるためには、さまざまな創意工夫が必要です。創意工夫と意欲を持って仕事をすると、必ず「何とかしてあげたい」という協力者が現れます。当社には、そのような社員が近年、少しずつ増えてきています。第二創業の歩みはまだ始まったばかりですが、豊富な知識と高度な技術力に加え、人間性も豊かな社員を育成し、コンサルタントにとって最も重要な「問題解決力」を高めることで、より良い価値をお客様に提供できるよう、全社一丸となって取り組んでまいります。

新春を迎え、皆様のご健勝を心よりご祈念申し上げるとともに、今年一年も変わらぬご指導を賜りますようお願い申し上げます。



代表取締役社長 舟田 幸太郎

卓越した技術の証―北海道開発局表彰などを受賞

日高自動車道新冠町維持管理施設設計外一連業務で開発局局長表彰を受賞



開発局幹部らと記念撮影を行いました

北海道開発局の令和6年度局長表彰が7月30日に札幌合同庁舎で開催され、当社は室蘭開発建設部発注の「日高自動車道新冠町維持管理施設設計外一連業務」で受賞しました。当日は、舟田幸太郎社長と管理技術者の山本岳が坂場武彦局長から表彰状を受け取りました。今回の業務は2025年度の供用開始を目指している日高厚賀IC～新冠IC（仮称）間の道路設計などを行いました。管理技術者の山本は「局長表彰という大変栄誉ある賞を受賞し、大変光栄に思っています。限られた業務期間の中で、複数の関係機関との協議など、難しいこともありましたが、発注者との連携をしっかりと行い、完成することができました。再び受賞することができるよう、今後もさらに研鑽を重ねていきます」と話しています。

幾春別川周辺林道検討業務で札幌開発建設部部長表彰を受賞



桑島部長（右）と記念撮影を行いました

札幌開発建設部の令和6年度部長表彰が7月31日に札幌開発建設部で開催され、当社は「幾春別川周辺林道検討業務」で受賞しました。当日は、舟田幸太郎社長と管理技術者の櫻井信作が桑島正樹部長から表彰状を受け取りました。今回の業務は、幾春別川総合開発事業のうち、新桂沢ダムの建設に伴う付替え林道について、道路詳細検討・法面対策検討・橋梁護岸修正設計などを行いました。管理技術者の櫻井は「新桂沢ダムは2023年11月試験湛水であることから、複数の設計項目を期限内に同時進行する業務だったため、正確性はもちろん、全体のスケジュール管理やマネジメントをしっかりと行うよう意識して業務を進めました。今回の受賞は大変嬉しく、次にステップアップするために、さらに技術を磨いていきたいと思っています」と話しています。

2024年度技術者等表彰



工藤次長(右)が表彰を受けました

全国地質調査業協会連合会は5月22日に東京都内の如水会館で2024年度技術者等表彰を行い、当社の工藤忠調査部次長が表彰されました。長年地質調査業務に精励し、その功績から北海道地質調査業協会からの推薦を受けたもので、当日は田中誠会長から表彰状を受け取りました。工藤次長は「大変栄誉のある賞をいただいた。今後も研鑽を重ね、企業と業界の発展に尽くしたい」と話しています。



巨大地震発生を想定した避難訓練と災害対応研修を開催



アナウンスを受けて机の下に避難

2024年度ACSグループ防災訓練および全社災害対応研修を9月2日に開催しました。小樽市を震源とした巨大地震が発生し、札幌市内でも建物や道路などが被災したとの想定で、災害時の行動や安否確認などを各部署などが連携を取り合って迅速に行いました。訓練は、小樽市を震源としたマグニチュード7の直下型地震が発生し、札幌市内を中心として建物や道路等に甚大な被害が発生したとの想定で行われました。当社のビルは、損傷はないものの、ロッカーなどが倒れました。正面玄関前にある電柱が傾き、道路は液状化し、停電が発生。社内のインターネット回線が断線し使用不能という状況で実施しました。訓練は午前10時にスタート。「マグニチュード7の地震が発生しました。社員は机の下へ避難してください」との社内アナウンスが流れ、指示に従って机の下に避難し、身を守ります。2分後に揺れが収まり、火災の有無を点検し、異常ないことを確認します。続いて応接室に舟田幸太郎社長ら幹部が集まり、対策本部を設置。発電機の作動に伴ってテレビで災害情報の収集を始めます。

社内の状況は、建物の被害はないものの、棚やモニターなどが倒れ資料が飛散。WiFiは動かずLTE回線でのみNETが可能となっていました。安全衛生委員が社内外を巡回し、けが人がいないことや、事務所周辺の安全確認を行い、地震発生から15分後の午前10時15分、「本社の状況を確認しました。火災の発生はありません。社員は比較的損傷の少ない2階に避難して下さい」とのアナウンスが流れます。

この後、家族の安否が不明な職員を帰宅させるとともに、当日出張中や現場にいる社員の安否を確認し、これらを対策本部に報告し、訓練を終了しました。



避難状況などの情報を集約する対策本部

訓練終了後には、協創ラウンジで全社災害対応研修を開催しました。舟田社長のあいさつに続いて、渡辺亮常務が「自治体避難状況などの情報を集約する対策本部の災害対応」を説明し、熊木功治事業本部長が当社の災害対応方針を解説しました。その後、技術向上部会による災害対応勉強会を行い、最後に港高学調査部長がこの日の防災訓練の状況を報告しました。



協創ラウンジで全社災害対応研修を開催

14

技術者列伝

青山 士

後編

～技術者の正義を貫いた人～



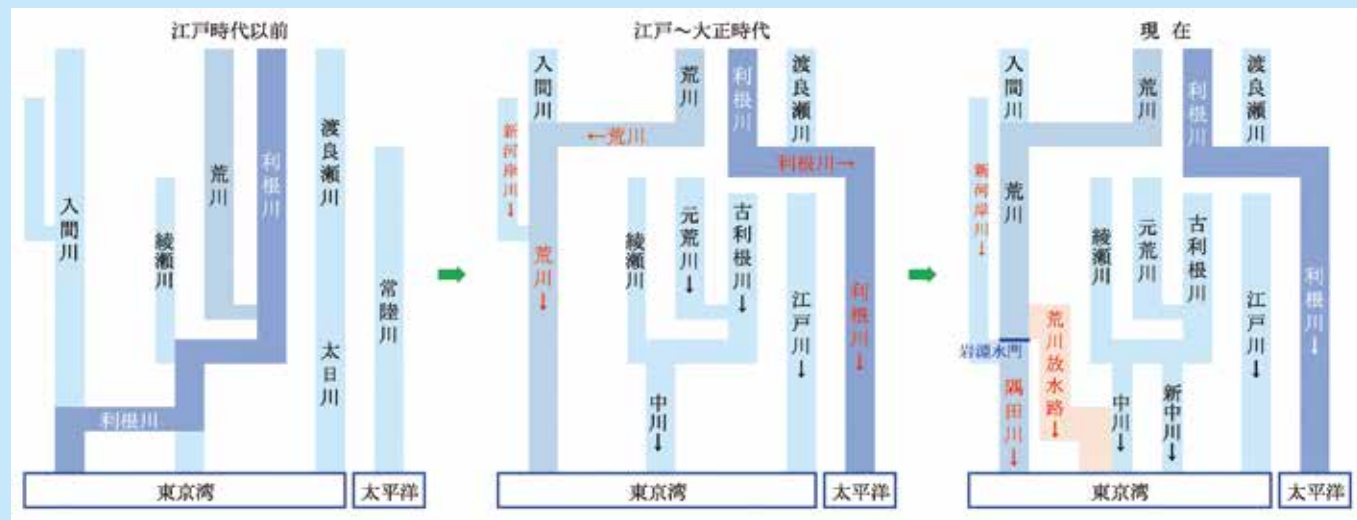
Akira Aoyama

土木学会附属土木図書館 提供

米国の日本人排斥機運を忌避して帰国した青山士は、その報告と再就職の相談のため、恩師の廣井勇を訪ねます。廣井の紹介で内務省に入省すると荒川改修事務所に配属されます。海外で培った最先端の技術力と経験を見込まれ、国内の様々な難事業に係ることになります。

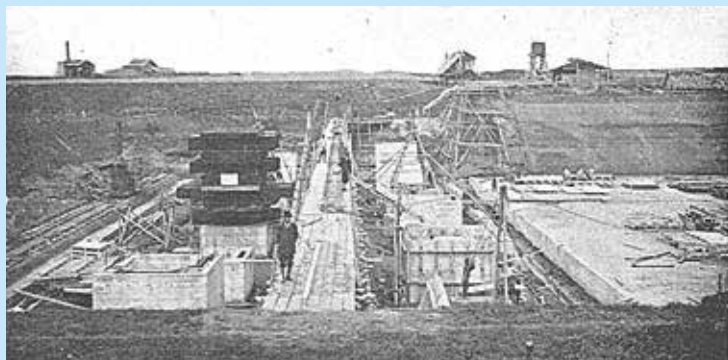
○荒川の変遷

荒川は名が示す通り「荒ぶる川」であり、古くは利根川の支流でした。江戸の水運整備で著名な伊奈忠治らが利根川と荒川を分離し(利根川東遷・荒川西遷)、荒川の河口は今の隅田川の位置になりました。しかし、地盤が低い地域(江戸川・江東・葛飾・墨田区)ではその後も洪水が絶えず、特に大被害となった1910(明治43)年出水の後、河川改修の要望が高まりました。翌年、事業が発足して原田貞介が立案したのは、放水路で東京湾に直接放流する河道計画でした。隅田川は既に堤防が盛れないほど市街化が進んでいたためです。総工事費3000万円という空前規模の大事業は(当時の大卒初任給は35円程度)、1896(明治29)年に制定された河川法により国費が投入可能な体制となっていて、ようやく成立した事業でした。青山の帰国は、丁度この事業が発足した時だったのです。



○荒川放水路工事

青山は工事を指揮する主任技師として用地交渉から測量・設計まで携わりました。当時の用地交渉は土地所有者に書類を送付するだけの対応で、裁判沙汰が多かったのです。青山は「交渉の場で役人と所有者は対等」と丁寧な交渉を続けました。1915(大正4)年には、隅田川と



工事中の旧岩淵水門 (土木学会附属土木図書)

荒川放水路を分離する重要施設、岩淵水門の工事主任となります。設置箇所は軟弱地盤であったため、費用面での反対を押しきって、深さ20mに鉄筋コンクリート枠(井筒基礎)を6基配して床板を載せた頑強な基礎を構築しました。1918(大正7)年からは事務所主任として全工事の指揮を任されます(翌年に宮本武之輔が着任)。工事は難工事が続き、特に1923(大正12)年の関東大震災は堤防に甚大な被害が発生しました。復旧には多くの資材と労力が投入され、工期が遅れつつ進められました。しかし完成間近の1927(昭和2)年、大河津分水路自在堰陥没事故の対応のため、青山は新潟土木出張所に転任し、1930(昭和5)年の放水路完成を待たず事務所を去るのです(新潟では再び宮本が部下となります)。



○青山の後半生

青山は1934(昭和9年)、技術者の頂点たる内務技監に就任し、同時期に土木学会会長も務めています。しかしその2年後、技官と事務官の処遇格差をめぐる対立が紛争に発展し、責任を取って辞任するのです。彼の技術者としての在り方は、深く傾倒した内村鑑三の教えが根底にあると思われます。その思想は大河津分水路の竣工記念碑に刻まれた「萬象ニ天意ヲ覺ル者ハ幸ナリ」「人類ノ為メ國ノ為メ」の言葉に表れています。義理堅く、責任感が強く、不正を嫌う性格で、自分が関わる仕事に妥協はありませんでした。辞職後でも大きな台風が来ると夜行列車で上京し、荒川放水路を見守ったといいます。軍国時代にあっても「軍艦より治水を優先すべし」と公言し、パナマ運河の爆破を計画していた大日本帝国海軍からの情報提供要請を拒否します。技術者の正義を貫き、自らの仕事に誇りを持っていた青山は、晩年に生活困窮しつつも、その姿勢は変わりませんでした。

荒川放水路は1965(昭和40)年、正式に荒川の本流となり、分流元の旧荒川は隅田川となります。青山が設計した岩淵水門は1982(昭和57)年までの60年間役割を果たした後、歴史的建造物として保存されています。旧岩淵水門は竣工から100年を迎える今も、青山に代わって荒川を見守り続けているのです。



旧岩淵水門と現在の岩淵水門：通船のため引き上げた右側ゲートがスライドする形式



井形 淳 設計部 技師長 工学博士 / 技術士 (建設部門)

2回にわたってご紹介した青山士は、技術的な背景のみならず、技術者としての生き様や思想が正に廣井勇の直弟子という印象でした。困難に向き合いながらも未知に挑戦する精神は、技術者として見習うべき姿があるのではないのでしょうか。

1967 年札幌市生まれ。1993 年室蘭工業大学大学院建設システム工学修了、1996 年室蘭工業大学大学院建設工学修了。北海道開発局開発土木研究所を経て、建設コンサルタント会社に勤務。2015 年 (株) エーティック入社



将来のありたい自分を設計する — キャリアプラン研修を実施 —

当社は8月26日、協創ラウンジでキャリアコンサルタントの本村規子さんを迎えキャリアプラン研修を開催しました。昨年に策定した、当社の長期ビジョンのミッションとビジョンの具体化に向け、一人ひとりが自律的に自分のキャリア形成を図ることを目的としています。研修では、過去の振り返りから今後の目標と計画を設計する作業を4つのステップを経て行い、自分が目指す将来の姿を描きました。

研修は、午前中は若手・中堅社員を対象に行い、午後からは管理職を対象に実施しました。午前中は本村さんから、今回の研修について「中長期的な視点に立ったキャリアプランを策定することで、自分のキャリアをあらためて考え、現在の仕事の意味づけやモチベーションアップにつながります」との説明を受け、過去の振り返りや、「ジョハリの窓」を使った現状整理、将来のありたい自分の整理、今後の目標と計画の設計と、4つのステップで作業を進めました。また、午後からの管理職研修では、「自分でやった方が早い」を克服し、部下の成長を促すための仕事の任せ方を「自己認知(メタ認知:客観的視点)」と「デリゲーション(権限委譲)」という2つのキーワードからアプローチして学びました。



午前と午後に分けて研修を実施しました



室工大生2人を招いて インターンシップを実施

室蘭工業大学3年生の2人を招いて、8月26日から30日の5日間、インターンシップを実施しました。各部・課の担当者から仕事の概要などについての説明や現場見学などを行い、建設コンサルタントと役割や当社の特徴などを学んでもらいました。

初日は午前中に建設コンサルタントの役割などを学び、午後からは札幌市内西区の大規模盛土造成現場の地下水観測と現地踏査を行いました。2日目以降は各部の業務説明と体験実習を行い、体験実習では、地下水観測結果の整理やひずみゲージ変換器を用いた計測・データ処理などを経験しました。また、現場実習では、石狩川における鳥類調査や、朝里トンネルの現場見学会などを実施しました。



建設コンサルタントの役割や当社の仕事などについて学んでもらいました

NEWS 共同開発した「地山応力測定装置」が特許を取得



—— エーティックとフジタ、北海道大学



開発を担当した釣賀課長

当社とフジタ、北海道大学大学院工学研究院環境循環システム部門が開発した「地山応力測定装置」がこのほど、特許を取得しました。地山の微細な変形挙動を測定・数値化することで、トンネル掘削の際の安全性や作業の効率を高めることが可能となります。地山の初期応力については、昭和から平成にかけて国内外の鉱山で実験が行われてきましたが、安定したデータの取得や、パイロット孔から装置を安全に回収する仕組みが構築されていなく、装置の改良が求められていました。この課題に対応するため、フジタと北大では5年ほど前から研究を進め、これにトンネル計測に長年携わってきた当社が参加し、開発

に取り組みました。

開発を担当した、計測部の釣賀雅人課長は「パイロット孔から測定装置の先端にあるセンサは、常にボーリングマシンの削孔水や振動にさらされながら、100分の1mmの変形を測定する必要があり、筐体サイズの制約と過酷な環境下での微小変形測定という2つの課題を解決することに苦労しました」と話します。

念願の特許取得については「先進ボーリングを行うトンネルに使用すれば、精度の高いデータを得ることができ、工事の安全性や作業効率の向上に大きく寄与すると思います」と、今後の活用に期待を寄せています。



特許証



特許を取得した
地山応力測定装置

道内トンネル文献あれこれ

令和6年7月～令和6年11月において、専門雑誌等に発表された、北海道内のトンネルに関する論文・報文等のリストを紹介します。トンネル関係者の方々へ最新情報を提供いたします。なお、詳細を知りたい方は弊社までお問い合わせ下さい。



国道・道道他

- 1 岡崎雄一:北海道縦貫自動車道 七飯町 大沼トンネル避難坑西大沼工区新設工事, 北海道土木技術会トンネル研究委員会会報, No.75, pp7-13, 2024.
- 2 煤田昌也:道道小樽環状線交付金(最上トンネル)工事, 北海道土木技術会トンネル研究委員会会報, No.75, pp14-18, 2024.
- 3 岡崎雄一:小断面NATMにおける熱水変質を受けた低強度地山と多量湧水への対策—北海道縦貫自動車道七飯町大沼トンネル避難坑西大沼工区一, 第94回(山岳)施工体験発表会, 2024.



新幹線・鉄道

- 4 引地陽太:北海道新幹線 朝里トンネル他工事, 北海道土木技術会トンネル研究委員会会報, No.75, pp1-6, 2024.
- 5 青木雄大:小土被りで脆弱な膨張性地山における新幹線トンネルの工事—北海道新幹線 青野トンネル外1箇所他工事一, 第94回(山岳)施工体験発表会, 2024.
- 6 中西正樹:新生代(古第三紀以降)の泥岩を含む地山における盤ぶくれ対策について—北海道新幹線 立岩トンネル(ルコツ)一, 第94回(山岳)施工体験発表会, 2024.
- 7 金子泰久:新幹線トンネルにおける斜坑の分岐から本坑交差部の施工—北海道新幹線、札幌トンネル(銭函)工事一, 第94回(山岳)施工体験発表会, 2024.

A-TiC à la cart



■下期安全大会を開催

2024年度ACSグループ下期安全大会を9月19日に本社協創ラウンジで開催しました。舟田幸太郎社長は、「ゼロ災を達成するためには、送り出し教育と現地K Y、作業を止める勇気、指摘し合える風土が重要になる。1人1人の心の持ちよう、行動の持ちようを今日の機会に新たにしてほしい」と呼び掛けました。大会の最後には、計測部の余語正成さんが安全宣言を行いました。



業務最盛期を控え安全を再確認しました

■滝野公園で植栽活動

国営滝野すずらん丘陵公園で6月22日、植栽活動を行いました。当社の経営理念である「国土づくりに貢献する」を実践する取組として毎年実施しているもので、今回は社員と家族24人が参加しました。この日は、サルビア、ビデンス、ユーフォルビアの3種類の花を用意。同園職員から植え方を教わった後、東口ゲートにあるプランターに10個に色鮮やかな花を植えました。



24人が参加して花を植えました

■ACSグループ技術発表会

2024年度ACSグループ技術発表会を9月19日に本社協創ラウンジで開催しました。技術者6人がそれぞれの担当業務で得た知見や見解を論文にまとめて発表しました。審査員6人による選定の結果、最優秀賞は設計部の畑村美希さんが受賞、優秀賞にアクティックの尾原卓也さんと計測部の釣賀雅人さんが選ばれました。



担当業務で得た知見や見解を発表

■技術士全国大会パネル展に出展

第50回技術士全国大会が10月5日、札幌パークホテルで開催されました。北海道では2013年以来11年ぶりの開催です。「共創の大地・北海道から始まる技術士の挑戦」をテーマに式典や分科会などで意見交換が行われたほか、協賛企業や団体によるパネル展が開催され、当社も出展いたしました。



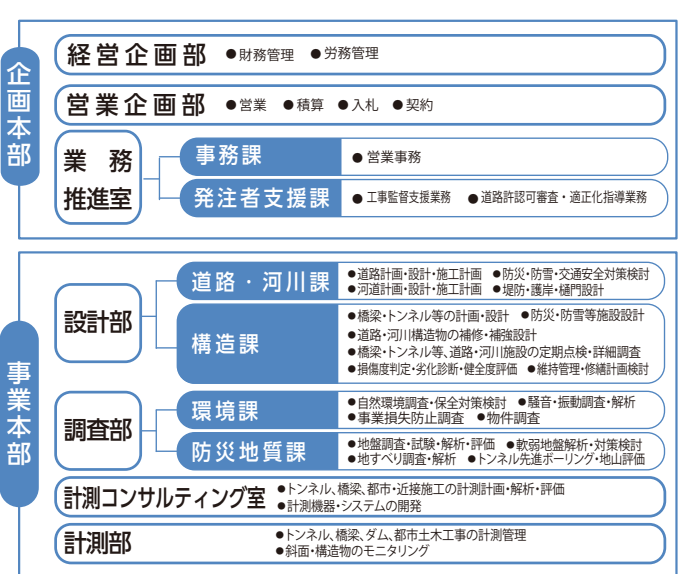
当社の出展ブース

株式会社 エーティック 会社概要

- 商 号 株式会社エーティック
- 代表者 代表取締役社長 舟田 幸太郎
- 所在地 〈本社〉 札幌市西区二十四軒1条5丁目6番1号
- 創 業 昭和48年1月31日
- 資本金 48,000千円
- 従業員 99名
- 事業所 札幌本社 東京支店 函館支店 道央営業所 旭川営業所
- 表 彰

令和6年	北海道開発局	局長表彰受賞
	北海道開発局	札幌開発建設部 部長表彰受賞
令和5年	北海道開発局	局長表彰受賞
	北海道開発局	小樽開発建設部 部長表彰受賞
	北海道開発局	旭川開発建設部 部長表彰受賞
	北海道開発局	稚内開発建設部 部長表彰受賞
令和4年	北海道開発局	局長表彰受賞
	北海道開発局	小樽開発建設部 部長表彰受賞
	北海道開発局	網走開発建設部 部長表彰受賞
	稚内建設管理部	優秀現場代理人表彰
令和3年	北海道開発局	局長表彰受賞
	北海道開発局	札幌開発建設部 部長表彰受賞
	北海道開発局	留萌開発建設部 部長表彰受賞
令和2年	北海道開発局	帯広開発建設部 部長表彰受賞

組織図



編集後記

冬本番を迎えています。広大な北海道は、地域によって気象や道路状況がまったく異なります。通勤や現場作業時には、天気の変化を踏まえて、安全最優先で、日常の生活でも、体調管理に十分注意して厳しい冬を乗り越えましょう。

広報委員会 広報誌部会